



「顔と顔を突き合わせて相手と深く関わっていくのがニバルレキレの強み」と話す小山さん(右)



患者が治療薬を売ってしまうこともあるため、薬物乱用の危険性を伝えるワークショップを開催



「ハウスオブメルシー」で薬物依存と向き合い、社会復帰を目指す若者たち

働き手がHIV/AIDSで亡くなる
と、家族は経済的にも精神的にも打撃
を受ける。喪失感から立ち直れず、学
校も卒業できずに退学してしまうエイ
ズ孤児も多い。
「自分を大切にできないと相手も大
切にできません。まずは自尊心を取り
戻してもらう必要があります。ニバル

解決策を共に探し 新しい道を進む

「何でも屋」の小山さんに、地域の人々
は次第に心を開いていった。「これか
らは活動に名前を付けたら?」ニバル
レキレ「はどう?」と提案された。こ
れは、南アフリカで使われているズー
ル語で「あなたはあなたであるだけ
で素晴らしい」という意味。そんな思
いを込めて団体を立ち上げ、今も活動
を続けている。

どんな状況でも、どんな人も、この
世界に一つだけの大切な命だと伝えたい
。「老若男女、生きづらさ」を抱
える人の重荷を減らせるように共に歩
んでいくだけ」と語る小山さん。それ
がずっと変わらないニバルレキレの信
念だ。

レキレのメンバーは、現地スタッフも
含めてみんなソーシャルワーカー。何
度も直接会って、相手が本音を話して
くれるのを待ちます。その瞬間から新
しい一歩が始まりますから。」
05年には、エクルレニのエマブニペ
地区に、一緒に生きる共同体を意味
するセチャバコミュニティセンター
を設立。約150人のエイズ孤児が放
課後に通い、地域の人々がボランティア
アで食事を用意したり補習を行ったり
する。小山さんも年に数回、南アフリ
カに渡航してサポートし、現地スタッ
フのムズワキさんを中心に、彼ら自身
の力で運営できるようにしてきた。
そして最近、「世界の人びとのための
JICA基金」を活用して新たに取
組み始めたのは、若者の薬物依存への
対策。無料で手に入るHIV/AIDS
の治療薬にマリファナやヘロインを混
ぜた薬物が流行しているからだ。そこ
で、薬物依存から立ち直る治療を受け
られる施設「ハウスオブメルシー」と
連携し、薬物乱用防止に向けた啓発活
動や若者の進学相談を行っている。15
歳以上のエイズ孤児を支援する施設や
制度は他にほほえないからだ。

V/AIDS患者の多い国。「行ってみよ
う!」。何かの縁を感じた小山さんはそ
う決意し、2003年から約2年半、
ヨハネスブルクの貧困地区で活動した。
携わったのは、HIV/AIDS患者やそ
の遺族、HIV/AIDSで親を亡くした
エイズ孤児のケアだ。「ソーシャルワ
ーカーは相手がどんな問題を抱えている
かに耳を傾け、解決策を一緒に探して

いくのが仕事です。患者さんがどんな
暮らしをしてきたのか、なぜHIV/
エイズに感染したのか。職業柄、も
っと深く知りたいと思うようになりま
した」と小山さんは振り返る。
思い立ったら即行動。小山さんは、
隣接するエクルレニのスラムを回って
話を聞いたり、HIV/AIDS教育の
普及や患者の自助グループの手伝いを

「ニバルレキレ I am special」は、
小山えり子さんが代表を務めるNGO
の名前。ちよつと変わったこの団体名
には、ある熱い思いが込められている。
小山さんはソーシャルワーカー。東
京都内の病院で勤務していた時、在留
資格のないアフリカ人の患者が搬送さ
れた。末期のHIV/AIDS患者。ア
フリカに関心を持ったきっかけだった。
ある日、ふと新聞の小さな記事に目
が留まった。南アフリカのホスピスで
日本人が活動しているという内容だっ
た。同国は世界でも3本指に入るHIV

ソーシャルワーカーだからこそ できること



セチャバコミュニティセンターに通う近隣の小学校の子どもたち。ボランティアが準備した給食を提供



セチャバコミュニティセンターでは無料でエイズ孤児を受け入れ、現地スタッフと地域のボランティアで運営している



スラムの入り口にあるセチャバコミュニティセンターの庭で、スタッフと遊ぶエイズ孤児たち。子どもらしく過ごす時間をつくり出す



国際協力の担い手たち

ニバルレキレ ~ I am special! ~

心のケアで輝く一人一人の命

ずっと自分の中にしまい込んでいた深い悩み。
それから解放された瞬間、人は少しずつ変わっていく。
HIV/AIDSが社会に影を落とす南アフリカで、
人々の心を照らそうと奮闘するNGOがニバルレキレだ。

